

第一章

年紀は少いの、餘程好きだと見えて、然もおい
 しさうに煙草を喫みつゝ、しかし烈しい暑さ
 に弱つて、身も疲れた様子で、炎天の並木の下に憩
 んで居る學生がある。

まだ二十歳そこらであらう、久留米餅の、紺の濃
 く綺麗な處は初々しい。けれども、着がへのなさか、
 幾度も水を潜つたらしく、肘、背筋、折りかゞみの
 あたりは、然らぬだに、あまり健康さうにはないの
 が、薄瘦せて見えるまで、其の處色が褪せて禿げて
 居る。――茶の唐縮緬の帯、それよりも煙
 草に相應はないのは、東京のなにがし工業學校の金
 色の徽章のついた制帽で、巻蓆ならまだしも、喫む
 で居るのが刻煙草である。

場所は、言つた通り、城下から海岸の港へ通る二
 里餘りの並木の途中、ちやうど眞中處に、昔から傳

説を持つた大な一面の石がある。――義經記に、

加賀國富樫と言ふ所も近くなり、富樫の介と申すは當國の大名なり、鎌倉殿より仰は蒙らねども、内々用心して

判官殿を待奉るとぞ聞えける。武蔵坊申しけるは、君はこれより宮の越へ渡らせもはしませ、

――

とある。金石の港で、即ち、舊の名宮の越である。

眞偽のほどは知らないが、おなじ城下を東へ寄つた隣國へ越る山の尾根の談義所村と云ふのに、富樫があとを追つて、つくり山伏の一行に杯を勧めた時、武蔵坊が鳴るは瀧の水、日は照れども絶えずと、謡つたと傳ふる（鳴は瀧）小さな瀧の名所があるのに對して、此を義經の人待石と稱ふるのである。行歩健かに先立つて來たのが、あるき悩むだ久我どの、姫君。――北の方を、乳母の十郎權の頭が扶け參らせ、後れて來るのを、判官がこの石に憩つて待合

はせたと云ふのである。目覺しい石である。夏草の茂つた中に、高さはたゞ草を抽いて二三尺ばかりだけれども、廣さ凡そ疊を數へて十五疊はあらう、深い割目が地の下に徹つて、もう一つ八八疊ばかりなのと二枚ある。以前は此が一面の目を驚かすものだったが、何の年かの大地震に、坤軸を覆して、左右へ裂けたのださうである。

また此の石を、城下のものは一口に呼んで巨石とも言ふ。

石の左右に、此の松並木の中にも、形の丈の最も勝れた松が二株あつて、海に寄つたのは亭々として雲を凌ぎ、町へ寄つたは拮蹒して、枝を低く、彼處に湧出づる清水に翳す。

其處に、青き苔の滑かなる、石圍の掘抜を噴出づる水は、音に聞えて、氷の如く冷やかに潔い。人の知つた名水で、並木の清水と言ふのであるが、此は踏傍に自から湧いて流るのでなく、人が圍つた持主があつて、清水茶屋と言ふ茶店が一軒、田畝の土

手^う上^へに廂^{ひさし}を構^{かま}へた、本^{ほん}家^けは別^{べつ}の、出^で茶^ぢ屋^やだ^れども、
一^ち寸^{よつと}見^み露^らの座^ざ敷^{しき}もあ^ある。あ^あの低^{ひく}い松^{まつ}の枝^{えだ}の地^ぢ紙^が形^{みなり}に
翳^{さしおほ}蔽^ほへ^へる葉^はの裏^{うら}に、葺^{よしず}簀^すを掛^かけて、掘^{ほりぬき}抜^ぬきに繞^{めぐ}らした
中^{なか}を、美^{うつく}しい清^{しみづ}水^{みづ}は、松^{まつ}影^{かげ}に揺^ゆれ動^{うご}いて、日^ひ盛^{さか}り
白^{しら}銀^{がね}の月^{つき}影^{かげ}をこぼして溢^{あふ}るゝの^のを、廣^{ひろ}い水^{すい}槽^{さう}でうけ
て、其^その中^{なか}に、眞^ま桑^{はうり}瓜^{うり}、西^{すい}瓜^{くわ}、桃^{もも}、李^{すもも}の實^みを冷^{ひや}して
賣^うる。

名^な代^{だい}である。

2

第二章

また畠^{はたけ}一^{たい}帯^{たい}、眞^ま桑^{はうり}瓜^{うり}が名^{めい}産^{さん}で、此^この水^{みづ}あ^あるがた^ため
か、巨^{おほ}石^{いし}の瓜^{うり}は銀^{ぎん}色^{いろ}だと言^いふ 瓜^{うり}畠^{はたけ}がづつと續^{つゞ}
いて、やがて蓮^{はす}池^{いけ}に成^なる それから皆^{みな}青^あ田^{をた}で。

畑のは知らない。實際、水槽に浸したのは、眞蒼
な西瓜も、黄なる瓜も、颯と銀色の蓑を浴びる。あ
くどい李の紅いのさへ、淡くくる／＼と淺葱に舞ふ。
水に迸る勢に、水槽を装束上つて、そこから百條の簾
を亂して、溝を走つて、路傍の草を、さら／＼と鳴
して行く。

音が通ひ、雫を帯びて、人待石　　―　　巨石の割
目に茂つた、露草の花、蓼の紅も、こゝに腰掛けた
と言ふ判官の其の山伏の姿は爽かに鎧うたる、色よ
き絨毛を思はせて、黄金の太刀も草摺も鳴るよ、と
ばかり、松のト梢は颯と、清水の音に通つて涼しい。
けれども、涼しいのは松の下、分けて清水の、玉
を鳴して流るゝ處ばかりであらう。

三間幅　　―　　並木の道は、眞白にキラ／＼と太
陽に光つて、ごろた石は炎を噴く……兩側の松は梢
から、枝から、おのが影をおのが幹にのみ這はせ
つゝ、眞黒な蛇の形を蜿らす。

雲白く、秀でたる白根が嶽の頂に、四時の雪はあ

りながら、田は乾き、畠は割れつゝ、瓜の畠の葉も赤い。来た處も、行く道も、露草は胡麻のやうに乾び、蓼の紅は蚯蚓が爛れたかと疑はれる。
人の往來はバツタリない。

大空には、恰も此の海の沖を通つて、有磯海から親不知の濱を、五智の如來へ詣つると云ふ、泳ぐのに半身を波の上に顯して、列を造つて行くとか聞く、海豚の群が、毒氣を吐掛けたやうな入道雲の低いのが、むく／＼と推並んで、動くともなしに、見て居ると、地が揺れるやうに、ぬツと動く。

見すばらしい、が、色の白い學生は、高い方の松の根に一人居た。

見ても、薄桃色に、又青く透明る、冷い、甘い露の垂りさうな瓜に對して、もの欲氣に思はれるのを恥ぢたのであらう。茶店にやゝ遠い人待石に――
で、其の石には腰も掛けず、草に蹲つて、そして妙な事をする。煙草を喫むのに、燐寸を摺つた。が、燃さしの軸を、消えるのを待つて、もとの箱に入れて、袂に藏つた。

乏しい様子が、燐寸ばかりも、等閑になし得ない道理は解めるが、焚残りの軸を何にしよう

蓋し、此の年配ごろの人数には漏れない、判官鼻肩が、其の古跡を、取散らすまい、犯すまいとした

のであつた

「此の松の事だらうか。」

「金石の湊、宮の腰の濱へ上つて、北海の鮧と烏賊と蛤が、開帳まゐりに、此處へ出て來たと云ふ、滑稽な昔話がある

人待石に憩んだ時、道中の慰みに、おの／＼一藝を仕らうと申合す。と、鮧が眞前にちよろ／＼と松の木の天邊へ這つて、脚をぶらりと、

「藤の花とは何うだの、下り藤、上り藤。」と縮んだり伸びたり。

烏賊が枝へ上つて、鰭を張つた。

「印半纏見てくんねえ。鳶職のもの、鳶職の

もの。」

其處で、蛤が貝を開いて、

「善光寺様、お開帳。」と恚う言ふのである。

鈍豆煙管を嘯むやうに啣へながら、枝を透かして
仰ぐと、雲の搦んだ暗い梢は、ちら／＼と、今も紫
の藤が咲くか、と見える。

3

第三章

「――彼處に鮎が居ます――」

と此の高松の梢に掛つた藤の花を指して、連の職
人が、いまの其の話をした時は

丁ど藤つゝじの盛な頃を、父と一所に、大勢で、
金石の海へ
船で鰯網を曳かせに行く途中
であつた

樂しかつた
既う其處の茶店で、大人たちは
一度吸筒を開いた。早や七年も前に成る
梅雨
晴の青い空を、流るゝ雲に乗るやうに、松並木の梢
を縫つて、すう／＼と尾長鳥が飛んで居る。

長閑に、静な景色であつた。

と炎天に夢を見る様に、恍惚と松の梢に藤の紫を
思つたのが、俄に驚く！ 其次なる烏賊の藝當、鳶
職と言ふのを思ふにつけ、學生の其の迫つた眉は忽
ち暗かつた。

松野謹三、渠は去年の秋、故郷の家が焼けたによ
り、東京の學校を中途にして歸つたまゝ、學資の出
途に窮するため、拳を握り、足を爪立てゝ居るので
ある。

否、唯學資ばかりではない。 其の日／＼の
米薪さへ覺束ない生活の惡處に臨んで、――實
は此日も、朝飯を濟ましたばかりなのであつた。

全焼のあとで、父は煩つて世を去つた。――
残つたのは七十に近い祖母と、十ばかりの弟ばかり。
父は塗師職であつた。

黄金無垢の金具、高蒔繪の、貴重な佛壇の修覆を

するのに、家に預つてあつたのが火に成つた。其の償ひの一端にさへ、あらゆる身上を煙にして、尚ほ足りないくらゐで、焼あとには灰らしい灰も残らなかつた。

貧乏寺の一間を借りて、墓の影法師のやうに日を送る。――

十日ばかり前である。

渠が寐られぬ短夜に 疲れて、寐忘れて遅く

起きると、祖母の影が見えぬ

枕頭の障子の陰に、朝の膳ごしらへが、ちやんと

出来て居たのを見て、水を浴びたやうに肝まで寒く

した。―― 大川も堀も近い。 つひぞ愚痴

などを言つた事のない祖母だけれど、頃日の餘りの

事に、自分さへなかつたら、木登りをしても學問の

思ひは届かうと、其を繰返して居たのであるから。

幸に箸箱の下に紙切が見附かつた。―― それに、假名でほつ／＼と（あんじまいぞ。）と書いてあつた。

祖母は、其の日もおなじほどの炎天を、草鞋穿で、
松任と言ふ、三里隔つた町まで、父が存生の時に工
賃の貸がある骨董屋へ、勘定を取りに行つたのであ
つた。

七十の老が、往復六里。

骨董屋は疾に夜遁

げをしたとやらで、何の效もなく、日暮方に歸つた
が、町端まで戻ると、餘りの暑さと疲勞とで、目が
眩んで、呼吸が切れさうに成つた時、生玉子を一個
買つて飲むと、蘇生つた心地がした。

「根氣の薬ぢや。」と、そんな活計の中から、朝
ごとに玉子を割つて、黄味も一二つわけにして兄弟
へ 萎れた草に露である。

「今朝も、其の慈愛の露を吸つた勢で、謹三
が此處へ来たのは、金石の港に何某とて、器具商が
あつて、其にも工賃の貸がある 懸を乞ひに出
たのであつた ー

若いものゝ癖として、出た處勝負の元氣に任せて、
影も見ないで、日盛を、松並木の焦げるが如き中途

に來た。

暑あつさに憩いこふだけだつたら、清しみづ水にも瓜うりにも氣き兼がなの
ある、茶ちや店みせの近きん所じよでなくつても、求もとむれば、別べつなる
松まつの下した蔭かげもあつたらう。

渠かれはひもじい腹はらも、甘あまく成なるまで、胸むねに秘ひめた思おもひ
があつた。

判官はんくわんの人待石ひとまちいし。

それは、其その思おもひを籠こむる、宮殿きうてんの大だいなる玉たまの床ゆかと
言いつても可よからう。

かないはかいだう 金石街道の松並木、丁ど此の人待石から、城下の空を振向くと、陽春三四月の頃は、天の一方をぼつと染めて、銀河の横ふ如き、一條の雲ならぬ紅の霞が懸る。

遠山の櫻に髣髴たる色であるから、花の盛には相違ないが、野山にも、公園にも、數の植わつた邸町にも、土地一統が、櫻の名所として知つた場所に、其の方角に當つては、一所として空に映るまで花の多い處はない。霞の瀧、かくれ沼、浮城、もの語を聞くのと違つて、現在、誰の目にも視めらるゝ。

見えつゝ、幻影かと思へば、雲のたゞずまひ、日の加減で、其の色の濃い事は、一齊に緋桃が咲いたほどであるから、或は桃だらうとも言ふのである。

紫の雲の、本願寺の屋の棟にかゝるのは引接の果報ある善男善女でないと拜まれない。が紅の霞は其の時節に此處を通る鯛賣鯖賣も誰知らないものはない。

深秘な山には、谷を隔て、見えつゝ近づくべからざる巨木名花があると聞く。いづれ、佐保

姫の妙なる袖の影であらう。

花の屋氣樓だ、海市である 雲井櫻と、其の

霞を稱へて、人待石に、氈を敷き、割籠を開いて、町から、特に見物が出るくらゐ。

けれども人々は、唯雲を掴むで影を視めるばかり
なのを 謹三は一人其の花咲く天 ー 雲井
櫻を知つて居た。

夢ではない。 得忘るまじく可懐しい、たゞ

思ふにさへ、胸の時めく里である。

此の年の春の末であつた。 ー

雀を見ても、燕を見ても、手を束ねて、寺に籠つては居られない。其の日の糧の不安さに、はじめは唯町や辻をうるついで廻つたが、落穂のないのは知れて居るのに、蹻音にも、けたましく驚かざるのは、草の鶉よりも尚ほ果敢ない。

詮方なさに信心をはじめた。世に人にたすけのない時、源氏も平家も、取絶るのは神佛である。

世間は、春風に大きく暖く吹かるゝ中を、一人陰に成つて霜げながら、貧しい場末の町端から、山裾の浅い谿に、小流の蜿々と、次第高に、何ヶ寺も皆日蓮宗の寺が續いて、天満宮、清正公、辨財天、鬼子母神、七面大明神、妙見宮、寺に祭つた神佛を、日課の如く巡禮した。

「御飯が食べられますやうに、」
父が存生の頃は、毎年、正月の元日には雪の中を草鞋穿で其處に詣づるのに供をした。參詣が果てると雑煮を祝つて、すぐにお正月が来るのであつたが、此はいつまでも大晦日で、餅どころか、袂に、煎餅も、榧の實もない。

あるてら
一寺に北辰妙見宮のまします堂は、森々とした樹立の中を、深く石段を上る高い處にある。

「ぼろきてほうこう。ぼろきてほうこう。」

晝も梟が鳴交はした。

此の寺の墓所に、京の友禪とか、江戸の伴優其とか、墓があるよし、人傳に聞いたので、其を捜すともなしに、卵塔の中へ入った。

墓は皆暗かった、土地は高いのに、じめ／＼と、落葉も拂はず、苔は萍のやうであつた。

ふと、生垣を覗いた明い綺麗な色がある。外の春日が、麗かに垣の破目へ映つて、娘が覗くやうに、千代紙で招くのは、菜の花に交る紫雲英である。

少年の臉は颯と血を潮した。

袖さへ軽い羽かと思ふ、蝶に憑かれたやうに成つて、垣の破目をするりと抜けると、出た處の狭い路は、飛々の草鞋のあと、まばらの馬の脊の形を、其のまゝ印して、亂れた龜甲形に白く乾いた。其にも、人の往來の疎なのが知れて、隈なき日當りが寂寞して、薄甘く暖い。

怪しき臭氣、得ならぬものを蔽うた、藁も蓆も、
早や路傍に露呈ながら、其處には董の濃いのが咲い
て、淡いのが草まじりに、はら／＼と數に亂れる。

馬の沓形の畠や、中窪なのが一面、青麥に菜を添
へ、紫雲英を畔に敷いて居る。眞向うは、こ
の邊一帶に赤土山の兀げた中に、ひとり薄萌黄に包
まれた、土佐繪に似た峰である。

唯、此の一廓の、徽章とも言つべく、峰の簷にも
似て、恰も紅玉を鑲めて陽炎の箔を置いた状に眞紅
に咲静まつたのは、一株の桃であつた。

綺麗さも凄かつた。すら／＼と呼吸をする、其の
陽炎にものを言つて、笑つて居るやうである。

眞赤な蛇が居ようも知れぬ。

が、渠の身に取つては、食に盡きて倒るゝより、
自然に死ぬなら、蛇に巻かれたのが本望であつたか
も知れぬ。

袂に近い菜の花に、白い蝶が来て誘ふ。

あゝ、いや、白い蛇であらう。

其の桃に向つて、行き状に、ふと見ると、墓地の上
に、妙見宮の棟の見ゆる山へ續く森の裏は、山際
から岨上を彩つて　――　はじめて知つた　――　
一面の櫻である。　　人は知るまい　――　
一面の櫻である。

行くに従うて、路は、奥擴がりにぐるりと山の根
を傳ふ。其の袂にも櫻が充ちた。

しばらく、青麥の畠に成つて、紫雲英で輪取る。
畔づたひに廻りながら、やがて端へ出て、横向に桃
を見ると、其の樹のあたりから路が坂に低く成る、
兩方は、飛々差覗く、小屋、藁屋を、屋根から埋む
ばかり底廣がりに奥を蔽うて、見盡されない櫻であ
つた。

餘りの思ひがけなさに、渠は寂然たる春晝を唯一
人、花に吸はれて消えさうに立つた。

其の日は、何事もなかつた　――　もとの墓地を
抜けて歸つた　――　ものに憑かれたやうに成つて、

夜はおなじ景色を夢に視た。夢には、櫻は、しかし
桃の梢に、妙見宮の棟下りに晃々と明星が輝いたの
である。

翌日も、翌日も 行つて其の三度の時、寺の
垣を、例の人里へ出ると齊しく、桃の枝を黒髪に、
花菜を褌にして立つた、世にも美しい娘を見た。

十六七の、瓜實顔の色の白いのが、おさげとか言
ふ、うしろへさげ髪にした濃い艶のある房りした、
其の黒髪の鬢が、故と成らずふつくりして、優しい
眉の、目の涼しい、引しめた唇の、やゝ寂しいのが
品がよく、鼻筋が忘れたやうに隆い。

縞目は、よく分らぬ、矢絣ではあるまい、濃い藤
色の腰に、赤い帯を胸高にした、とばかりで袖を覺
えぬ、筒袖だつたか、振袖だつたか、ものに隠れた
のであらう。

眞晝の緋桃も、其の娘の姿に露の濡色を見せて、
髪にも、髻にも影さす中に、其の瓜實顔を少く傾い

て、陽炎を透かして、峰の松を仰いで居た。

謹三は、ハツと後退りに退つた。――杉垣の破目へ引込むのに、かさ／＼と帯の鳴るのが淺間し
かつたのである。

氣咎めに、二日ばかり、手繰り寄せらるゝ思ひを
しながら、敢て行くのを憚つたが――また不思議に北國にも日和が續いた――三日めの同じ頃、
魂がふツと墓を抜けて出ると、向うの桃に影もない。

勿體なくも、路々挿んだ佛神の御名を忘れようと
した處へ――花の梢が、低く響きく……藁屋は
づねに黒髪が見え、すらりと肩が浮いて、俯向いて
出た其の娘が、桃に立ちざまに、目を涼しく、と小
戻をしようとして、幹がくれに密と覗いて、此方を
ば熟と視る時、俯目に成つた。

思はず、爾時渠は蹲んだ。そして煙草を喫んだ形
は、――此處に人待石の松蔭と同じである――

が、姿も見ないで、横を向きながら、二服とは喫
みも得ないで、慌しげに又立つと、精々落着いて其
方に歩んだ。畠を、やゝめぐり足に、近づいた時で
あつた。

娘が、柔順に尋常に會釋して、

「誰方？」

と優しい聲を聞いて、はつとした途端に、眞上な
山懐から、頭へ浴びせて、大きな聲で、

「何か、用か。」と喚いた。

「失禮！」

と言ふ、頸首を、空から天狗に引摺まるゝ心地が
して、

「通道ではなかつたんですか、失禮しました、失
禮でした。」

「― それからは 寺までも行き得ない。」

第五章

人は何とも言はず言へ

で渠に取つては、花の其の一里が、所謂、雲井櫻の
仙境であつた。たとへば大空なる紅の霞に乗つて、
剩へ其の美しいぬしを視たのであるから。

町を行くにも、氣の怯けるまで、郷里にうらぶれ
た渠の身に、――誰も知るまい、――唯一人、
秘密の境を探り得たのは、潜在大なる誇りであつ
た。

が、ものゝ本の中に、同じやうな場面を読み、繪
の面に、然うした色彩に對しても、自から面の赤う
成る年紀である。

祖母の傍でも、小さな弟と一所でも、胸に思ふの
も憚られる。寝て一人の時さへ、夜着の袖を

被らなければ、心に描くのが後暗い。

―― 其を、此の機會に、並木の松蔭に取出で、
深秘なるあが佛を、人待石に、密に据えようとした
のである。

成りたけ、人氣勢に遠ざかつて、茶店に離れたの
に不思議はあるまい。

其の癖、傍で視ると、渠が目に彩り、心に映した
―― あの臆たけた娘の姿を、其のまゝ取出して、
巨石の床に据えた處は、松並木へ店を開いて、藤娘
の繪を賣るか、普賢菩薩の勸進をするやうな光景で
あつた。

渠は、空に恍惚と瞳を据えた。が、餘りに憧るゝ
煩惱は、却つて行澄ましたものゝ如く、容も心も涼
しさうで、紺紺さへ松葉の散つた墨染の法衣に見え
る。

時に、吸つたのが悪いやうに、煙を手で拂つて、
吠の煙草入を懐中へ藏ふと、靜に身を起して立つた

のは――更めて松の幹にも凭懸つて、縋つて、
あせつて、悶えて、――此處から見ゆると言ふ、
花の雲井をいまはたゞ、蒼くも白くも、熟と城下の
天の一方に眺めようとしたのであつた。

然りと、人は、と更めて、清水の茶屋を、松の
葉越に差窺ふと、赤ちやけた、ばさらな銀杏返をぐ
たりと横に、框から縁臺へ落掛るやうに浴衣の肩を
見せて、障子の陰に女が轉がる。

納戸へ通口らしい、淺間な柱に、肌襦袢ばかりを
着た、胡麻鹽頭の亭主が、賣溜の錢箱の蓋を壓へ状
に、仰向けに凭れて、あんぐりと口を開けた。

瓜畑を見透しの縁――其處が座敷――に
足を投出して、腹這ひに成つた男が一人、黄色な團
扇で、耳も頭もかくしながら、土地の赤新聞と言ふ
のを、鼻の下に敷いて居たのが、と見る間に、二ツ
三ツ團扇ばかり動いたと思へば、くるりと仰向けに
成つた胸が、臍まで寛かる。

清水はひとり、松の翠に、水晶の鎧を揺据ゑる。
蝉時雨が、唯一つに成つて聞えて、清水の上に、
ジーンと響く。

渠は心ゆくばかり城下を視めた。

遠近の樹立も、森も、日盛に煙の如く、重る屋根
に山も低い。町はづれを、蒼空へ突出た、青い薬研
の底かとするのに、きら／＼と眩い水銀を湛へたの
は湖の尖端である。

あのあたり、あの空

と思ふのに――雲はなくて、蓮田、水田、畠
を掛けて、むく／＼と列を造る、あの雲の峰は、海
から湧いて地平線上を押し廻す。

冷い酢の香が芬と立つと、瓜、李の躍る底から、
心太が三ツ、四ツむく／＼と泳ぎ出す。

清水は、人の知らぬ、こんな時、一層高く潔く、
且つ湧き、且つ進るのであらう。

蒼蠅がブーンと来た。

其處へ

6

第六章

如何に、あの體では、蝶よりも蠅が集らう

さし捨のおいらん草など塵塚へ運ぶ途中に似た、いろ／＼な湯具蹴出し。年増まじりにあくどく化粧つた少い女が六七人、汗まみれに成つて、つい其處へ、並木を來かゝる。年増分が先へ立つたが、い

づれも日蔭を便るので、扱れた洗濯ものゝやうに、其の濡れるほどの汗に、裾も振もよれ／＼に成りながら、妙に一列を造つた體は、率あるものがあつて、一からげに、繩尻でも取つて居さうで、淺間しいまでははれに見える。

故あるかな、背後に迫つて男が二人。一人の少い

方は、洋傘を片手に、片手は、はた／＼と扇子を使ひ／＼來るが、扇子面に廣告の描いてないのが可訝いくらゐ、何のためか知らず、絞の扱帯の背中に漢竹の節を詰めた、杖だか、鞭だか、朱の總のついた奴をすくりと刺して居る。

年倍なる兀頭は、紐のついた大な蝦蟇口を突込んだ、布袋腹に、禪のあからさまな前はだけで、土地で賣る雪を切つた氷を、手拭にくるんで南瓜かぶり、頤を締めて、矢張り洋傘、此の大爺が殿で。

「あらツ、水がある」

と一人の女が金切聲を揚げると、

「水がある？」

と言ふなりに、こめかみの處へ頭痛膏を貼つた顔を掉つて、年増が眞先に飛込むと、忽ち、崩れたやうに列が亂れて、ばら／＼と女達が茶店へ駆寄る。

一寸立どまつて、大爺と口を利いた少いのが、續いて入り状に、

「ぢやあ、何だぜ、お前さん方　ー　こゝで一
休みするかはりに、湊ぢやあ、何處にも寄らねえで、
すぐに、汽船だよ、船だよ。」　銀鎖を引張つて、
パチンと言はせて、

「出帆に、最う、そんなに間もねえからな。」

「おゝ、暑い、暑い。」

「あゝ暑い。」

最う飛ついて、茶碗やら柄杓やら。諸膚を脱いだ
のもあれば、腋の下まで腕まくりするのがある。

年増の如きは、

「さあ、水行水。」

と言ふが早いか、瓜の皮を剥くやうに、ずるりと
縁臺へ脱いで赤裸々。

黄色な膚も、茶じみたのも、清水の色に皆白い。

學生は面を背けた。が、年増に限らぬ　言合
せたやうに皆頭痛膏を、こめかみへ。その時、ほか
んと起きた、茶店の女のどろんとした顔にも、齊し
く即效紙がはつてある。

「食るが可い。よく冷えてら。堪らねえや。だが、
あれだよ、皆、渡してある小遣で各々持だよ　ー

西瓜すめくわが好よかつたらこみで行いきねえ、中なかは赤あかいぜ、
うあひけ合あひだ。 えへッへッ。 ー

きやあら／＼と若わかい奴やつ、蝸ひぐいしの化ばけた聲こゑを出だす。

「眞ま桑は、李すもを噛かむなら、あとで鹽湯しほゆを飲のみなよ。

ー うんにや飲のみなよ。大金たいきんのかゝつた身からだ體だ

だ。 ー

と大爺おほぢいは大だい王わうの如ごとく、眞正まつしやうめん面かまちの框あげに上あ胡あ坐ぐらに成なつて、ぎろ／＼と膚はだをみまはす。

唯とそ其なかの中なかを、すりと抜ぬけて、褌つまも慎つましいが、

ちら／＼と小刻こきざみに、土手どてへ出でて、巨石おほいしの其方そなたの隅すみに、

松まつの根ねに立たつた娘むすめがある。手てにも掬むすばず、茶ちや

碗わんにも後おくれて、浸ひたして吸すつたかと思おもふばかり、白地しろぢ

の手拭てぬぐひの端はしを、蒼つばむやうに一寸ちよつとくは啣しへて悄しれた。巢立すだち

の鶴つるの翼つばさを傷いためて、雲井くもゐの空そらから落おちざまに、宛如さながら、

畫顔ひるがほの花はなに絶すがつたやうなのは、ー 島田しまだ鬘まげに結ゆつ

て、二つばかり年としは長たけたが、其それだけに尚なほ女をんならし

い影かげを籠こめ、色香いろかを湛たへ、情なさけを含ふくむだ、浴衣ゆかた

は、しかし帯おびさへ其その時ときのを其そのまゝで、見紛みまがふ方かた

なき、雲井くもゐ櫻ざくらの娘むすめである。

第七章

「お前たち。渡した小遣。赤い西瓜。皆の身体。大金。――と渦の如く繰返して、其の娘のおなじやうに、おなじ空に、其の時、瞳をじつと据ゑたのを視ると、渠は、思はず身を震はした。

おもて
面を背けて、
みなと
港の方を、
くら
暗く成つた目に
めあふ
一目仰いだ時である。

「火事だ、」
きん
謹三は殆ど無意識に叫んだ。

「火事だ、火事です。」

とみ
唯見る、
あだい
偉大なる煙筒の如き煙の柱が、
むらがりわ
群湧いた、
にふだうくも
入道雲の頂へ、
うみ
海ある空へ眞黒にすくと立つと、
たい
太陽を横に並木の正面、
いた
板を赫と赤く焼いた。

「火事。――と道の中へ衝と出た、人の飛ぶ足より疾く、
くろけむり
黒煙は幅を擴げ、
びやうぶ
屏風を立て、
と
千

刃の斷崖を切立てたやうに聳立つた。

「火事だぞ。」

「あら、大變。」

「大いよ！」 火事だ火事だと、男も女も口々に

――

「やあ、馬鹿々々。何だ、そんな體で、引込ま

ねえか、こら、引込まんか。」

と雲の峰の下に、膚脱、裸體の膨れた胸、大な乳、

肥つた臀を、若い奴が、鞭を振つて追廻す――

爪立つ、走る、緋の、白の、股、向脛を、匆上げ、

薙伏せ、挫ぐばかりに狩立てる。

「きやつ。」

「わツ。」

と呼ぶ聲、女どもの形は、黒い入道雲を泳ぐやう

に立騒ぐ眞上を、煙の柱は、じり／＼と蔽ひ重る。

畜生―― 修羅―― 何等の光景。

忽ち天に蔓つて、あの湖の薬研の銀も眞黒に成つ

たかと思ふと、村人も、往來も、何時またく間か、どツと溜つた。

謹三の袖に、あゝ、娘が、引添ふ。

あはれ、渠の胸には、清水が其のまゝ、血に成つて湧いて、涙を絞つて流落ちた。

ばら／＼ばら！

火の粉かを見ると、こはいかに、大粒な雨が、一粉づゝ、粗く、疎に、巨石の面にかゝつて、ばツと鼓草の花の散るやうに濡れたと思ふと、松の梢を虚空から、ひら／＼と降つて、胸を掠めて、ひらりと金色に翻つて落ちたのは鮎である。

「火事ぢやあねえ、龍巻だ。」

「やあ、龍巻だ。」

「あれ。」

と口の裡、呼吸を引くやうに、胸の浪立つた娘の手が、謹三の袂に縋つて、

「可恐い」

「何うしませうねえ。」

と引ひいてすが縫ぬう、柔やはらかい細ほそい手てを、謹きん三さんは思おもはず、し
かと取とつた。

ー ー いかなに成なるべき人ひとたちぞ

【完】